㈲グランデファーム　代表取締役

衣斐 浩

馬と人の間にパートナーシップを育む「ナチュラルホースマンシップ」を採用している衣斐社長。
その背景には、馬への敬意がある。
馬はいつの時代も、人のために時に命を削って働き、命を懸けてレースを走るからだ。
だからこそ力で押さえつけるのではなく、コミュニケーションを取りながら信頼関係を築く。
そうした馬づくりにおいては、馬に関わるスタッフの技術のみならず、人間性も重視。
生産者の顔を思い浮かべながら、馬たちに目を掛けてほしいと願い、
さらには競馬関係者としてではなく、社会人としての成長を後押しする。
“育てる”――社長にとって、それがライフワークと言えるだろう。

育

「人に尽くす馬たちには敬意を忘れず、そこに関わる人の人間性も育むのが自分の方針です」

© 2017 KOKUSAI-TSUSHINSYA Co.,Ltd.

感動を巻き起こすサラブレッドと馬と共栄できる人材を育てたい

数百に上る生産・育成牧場があり、毎年、数千頭のサラブレッドを競走馬として送り出す北海道浦河郡浦河町。同地で、若駒の馴致や『JRA』施設を活用した育成調教、現役競走馬の休養、リフレッシュ放牧、現役馬のマネージメント業務などを手掛けるのが、『グランデファーム』だ。4頭のG1馬を輩出するなど、同牧場の出身馬たちは中央・地方競馬のG1レース、重賞レースで目覚しい実績を挙げている。本日は、タレントのつまみ枝豆氏が同牧場を訪問。血統研究をライフワークとする衣斐社長にお話を伺った。

COMPANY PROFILE

JRA（中央競馬）競走馬の育成・調教

有限会社 グランデファーム

北海道浦河郡浦河町字西幌別 61-4
URL：http://www.grandefarm.com/

Column

「北の大地に感謝し、人と馬とが共栄し、光り輝く未来を創造します」。この『グランデファーム』の経営理念は、衣斐社長の信念そのものだ。そこには、夢を持って北海道を開拓した先人たちへの感謝の想いがあるのだという。『開拓の過程では、多くの馬が貢献し、そして過酷な労働下で命を落とした馬は決して少なくありません。馬は健気で、人のために命を削って働いてくれる。そのことも忘れてはいけない』――。生産者にとって、馬は我が子同然だ。競走馬は過酷な運命を背負って走るが、だからこそ感謝を胸に、馬を大切に育成する社長に厚い信頼が寄せられるのだ。

また、馬の育成と共に、社長が力を入れるのが人材育成。若者のインターンシップの受け入れにも積極的で、「人生諦めた時が失敗で、諦めなければ失敗はない。だからこそこれと決めた道で努力し続けてほしい」とエールを贈る。馬と人に、深い愛を以て向き合う、それが社長のスタンスなのだろう。

代表取締役
衣斐 浩

岐阜県笠松市出身。祖父が馬主、父親が厩務員であるため、幼少期より馬に親しんで育った。高校時代から、笠松競馬場での馬の調教、血統配合の研究に没頭する。卒業後は、『東海競馬新聞社』に入社し、25年間勤務。2003年、育成牧場『グランデファーム』を設立。競走馬の育成の他、近隣の生産牧場や馬主からの要望に応えて配合コンサルティングも行っている。

幼少期より馬と共にある暮らしを送り2003年、『グランデファーム』を設立

――早速ですが、衣斐社長の歩みからお聞かせ下さい。

岐阜県笠松市の出身で、祖父は馬主、父は笠松の育成牧場の厩務員でして、家に厩舎もあったので物心ついた時から馬に親しんでいました。小学校時代から馬に乗り始め、高校時代は朝2時より調教を行ってから登校するという生活。笠松ではナンバーワンと言われていた調教師の方について調教を付けていたこともあって、その方の紹介で『東海競馬新聞社』に入社しました。

――それまではご自身で調教にも当たっておられたのに、馬乗りにはなられなかった、と。

子どものころから自然と培った経験がありましたので、新聞社に勤める傍ら、厩舎で馬の育成もしていましたよ。また、高校時代に馬の血統に詳しい獣医と出会ったことをきっかけに、血統配合に目覚めましてね。育成と血統配合を上手く噛み合わせることができてはじめて、馬を知っていると言えるので、やがて育成牧場を経営したいと考えるように。新聞社に25年間勤務した後、2003年にこちらへ転居して『グランデファーム』をスタートさせました。馬の育成経験はあっても、牧場の経営は初めて。岐阜の家を売り払って、後戻りできない状況にし、新たな一歩を踏み出したんですよ。

――それほどの覚悟を決めてのスタートだったのですね。

人間を信頼できる馬、技術と豊かな人間性を持つ人材を育てる

――数百という育成牧場があると聞いていますが、牧場ごとに方針も様々なのでしょうね。社長はどういったことを大切になさっているのですか。

馬を育てると同時に、人も育てることに重きを置いています。子どものころから落馬などによって何度も怪我をしてきましたが、落馬の原因は馬乗りの不注意によるものもあるものの、馬が嫌がるなどして暴れることによる落馬が多いんですね。そこで、馬にも人にも優しい調教として、「ナチュラルホースマンシップ」という調教方法を実践しています。昔のカウボーイのスタイルで、馬に恐怖感を与えたり、力で押さえつけるのではなく、コミュニケーションを取りながら、信頼関係を築きます。馬自身の選択で動かせてやることで、馬は人を信頼し、自然と人にリーダーシップを求めるようになるんですね。パートナーシップ、フレンドシップが生まれる調教方法です。信頼関係を築ければ、馬はストレスを感じず、決して暴れたりしませんから、馬に乗る人の安全も確保できるんです。

――馬と人が共存できる方法と言えそうですね。人材育成については？

お客様に喜んでいただける馬を育てられるだけの技術、そして馬業界以外でも通用する社会人になってもらいたく、外部の講習会の受講を積極的に勧めています。現在、12名のスタッフがおり、技術だけでなく人間性も磨いてほしい。毎朝の朝礼で経営理念を唱和し、朝礼に出なければペナルティも。時間管理がルーズな人間は、業界を問わず、信頼を得られませんからね。『JRA（日本中央競馬会）』の厩務員や調教師を目指している子もいて、馬主や関係者から信頼される人になってほしいんです。生産者からの信頼も然り。馬に関わる時は、生産者の方の顔を思い出し、「自分の馬だったら、もう一手間、二手間を掛けるんじゃないか」と自問自答するよう言っていますね。

――若い子たちを育成するのは忍耐がいるのでは？

いえいえ（笑）。私自身も若いころにはよく反抗しましたから、逆に「君たち、若いのにすごいな」とよく褒めます。また、こちらの意図が相手に伝わるかは伝え方次第。正直でいてほしければ、「嘘をつくな」と追い込むのではなく、「正直であることが格好良い」と分かってもらう。とは言え、指導者としてはまだまだですがね（笑）。

――社長はまるで学校の先生のようですね。今後については、いかがですか。

馬の育成に携わる以上は、やはり競馬ファンから愛され、今でも名馬として語り継がれているオグリキャップのような馬をつくりたいですね。当牧場で育てた馬も、4頭がG1を取りましたが、成績が全てではありません。その走りで感動を巻き起こす、競馬ファンが鳥肌が立つような、そんな馬をつくりたい。牧場の後継については、経営理念を守り、馬を愛し、牧場を守ってくれる人なら誰でも構いません。また、日本には3万人もの孤児がいると言われ、馬好きな子を引き取って育てたいという想いもあります。大好きな馬を通じて、自分にできることをコツコツ積み重ねます。

（取材／2017年6月）

After the Interview

「『ナチュラルホースマンシップ』を取り入れる牧場は増えてきているそうですが、その調教方法は一朝一夕で実践できるものではないそうです。そこには忍耐力が求められるでしょう。衣斐社長は、その忍耐力を持った経営者という印象です。馬に対しても、人に対しても、すぐに結果を求めず、失敗も糧として受け入れながら、少しずつ理想を形にしてこられました。ますますのご活躍に期待しています」　つまみ枝豆・談

© 2017 KOKUSAI-TSUSHINSYA Co.,Ltd.